大学院教育に関する調査

この調査は募集区分ごと（教育学専修４コース，障害児教育専修，教科教育専攻の各 10 専修）から，おのおの現職教員１名とストレートマスター１名に対して大学院教育に関する面接調査を行ったものである。質問項目とその回答結果のまとめを以下に示す。

Ｑ１　あなたは大学院の授業についてどのように思いますか。

学校教育専修の授業

レベルと内容：基本的に授業は丁寧で分かりやすい，という回答であった。他専攻を含む多人数の受講生がいるので，受講生のレベルや興味がまちまちである。しかし，大学院の授業なので，自分なりの努力は必要と理解しているようだ。また現職教員では自分の経験に照らし合わせて意味づけ出来るが，ストレートマスターではそうはいかない。担当者による話し合いのレベルを上げるためのアドバイスや積極的な働きかけを求めている。少人数だと，レベルなど教科教育専攻の院生にも配慮がなされているようだ。

専門外には内容が難しいのか，他専攻の院生は，講義よりレジュメ発表や討論形式を望んでいる。部分的に深く，また全体をも鳥瞰したいという要求を持つ受講生がいる。また，実習科目が少ないので，学んだ理論を深めるような実習科目を求めている。演習の中には，課題が高度で，勤務校の仕事と両立が難しいものもあるようだ。内容は大変よいのだが，課題などの質と量が減らないか，という希望があった。

教授方法：ストレートマスターにとっては，現職教員と受講すると張りが出るようだが，質問のしにくさがあるようだ。授業の準備と熱意は担当者によって差があるので，満足度は担当者による差が大きいようだ。質問のしやすさ，準備，やる気にも担当教員の個人差があると思われる。学校教育の教員には「教師の模範像」を求められているようで，魅力的で尊敬できる先生に教えて欲しい，という希望がある。

その他：多人数の受講生がいるので，授業の内容以外に現職教員同士のつながりや，人間関係の広がりを得られる意義が大きいと感じているようだ。シラバスの記載のないものや抽象的なものもあるようだ。読んでも，講義形式かゼミ形式かも分からないものもある，という指摘があった。

障害児教育専修の授業

一般的に他専修から受講している院生は少ないようだ。受講者による回答では，受講生に対する配慮があるので，レベルや内容に問題はないようだ。授業形式では討論の授業が多いようだが，講義形式も求められている（「研究」と「学び」のバランスの必要性）。しかし，他専修の院生では逆で演習形式を好むようだ。現職教員では，教育現場にいると，経験的なことから子供を捉えてしまいがちなので，授業の中で理論的なことや研究をふまえた上での見方，考え方を学ぶことができたのは良かった，という回答があった。近年，教育現場では必要度が高くなっているの

で，授業で学んだことが実践面で役立つとして受講している，受講生がいる。また，受講生が発表する形式の授業では，専門的な立場で担当者からのコメントが訊きたい希望があり，現職教員は現場での悩みに対して，専門的な理論やアドバイス等を求めているようだ。

教科教育専修の授業

レベルと内容：概して受講人数が少ないので，各受講生のレベル（授業内容や時間割にまで）配慮された丁寧な指導がなされているようだ。より深い専門性を求める院生と，教科教育に重点を置くことを望む院生がいることが分かった。芸体系では講義というより技術の伝授のような授業があるのか，マニアックな技術より幅を求めている傾向がある。教科の専門的な講義内容に関しては，学んだ実践と理論を学校現場でどういかしていくのかが，受講生の今後の課題であるようだ。

教授方法：14 条特例を使われていない現職教員の方は，課題が出るとつらいようだ。方法論の問題ではない，という指摘がある授業があるようだ。ゼミは学部生と分けて欲しい，という希望がある。

分野：教員全員で教科分野全体を網羅できていない現状に対しては，小規模大学だから，と納得しているようだ。GP 科目は概して好評である。ただ，GP 科目では，各論だけでなく総論的なこと，全体の枠組みや各論の位置づけを話して欲しい，という要望がある。GP 科目については立派な冊子ができているが，他大学では HP 上に詳しい，時には授業内容が載っている場合もある。具体例を示した広報が必要ではないか。教育委員会に丸投げの感あり，という厳しい意見があった。

専門：卒論生が一部の先生に偏り，その担当教員が多くの卒論生の指導に時間を取られているので，現職教員の指導にももっと時間を割いて欲しい，という希望があるようだ（教員一人あたりの人数制限の実施要求）。

シラバス：シラバスがないと特に他専修の院生は受講しにくい。

Q２あなたは大学院のカリキュラム（教育課程）についてどのように思いますか。

最低修得単位数：ストレートマスターではもう少し多くてもという意見があるが，現職教員では現行ぐらいが適当と考えているようだ。

授業のコマ数：大学院における教員免許取得についての寛容さが欲しい（既得免許の専修免許だけでなく，他教科や他種類の）。平成 12 年の教職免許改正後，専門的な指導力のない若い教員が見られるようになったので，大学として教科の指導力をもった教員を送り出す姿勢が必要，との指摘があった。現職教員の院生は管理職志向と教科の指導力アップ志向に分かれるので，既存の大学院は後者の要請に応えるカリキュラム編成が望まれているようだ。

開設時間割：重なる授業が複数あり履修するのが難しい科目がある。特に現職教員にとっては受講できる授業が限られ，選択の余地が非常に狭くなっているようだ。

GP 科目も受講したいものが重なっているようで，交通整理が必要と思われる。ストレートマスターには夜の授業はつらいが，現職教員にはありがたい，という相反する要求がある。現職教員特有のニーズとして，土日授業で隔週 2 コマ続きとか，土日の集中講義がある。夏期休暇中の集中講義はせっかくの休暇が減少するので，あまり好まれていないようだ。14 条特例で来られている現職教員の方は，夜間より昼間での開講を好まれるようだ。昼休みが短いという意見があった。

その他：受講登録時における指導教員の印においては，院生なので自分の責任で，登録期間が短いので指導教員の出張等で印をもらうのが大変，など廃止して欲しい希望があるようだ。

Q３　その他に何かご意見があればお答えください。

シラバス：とにかくないのは困る。シラバスに授業内容が掲載されていなかったり，掲載されている内容と全く異なる授業がある。シラバスを軽視する風潮があるのではないか，という厳しい意見があった。シラバスでは，その科目の選択を判断できる情報が欲しい。どの程度の専門外知識が必要か，校務で休む場合があるが ok か，など登録前に担当教員に問い合わせたいことがたくさんあるようだ。また，登録時に今持っている基本的な知識で，理論的な授業について行けるのか迷うようだ。質問にはどの担当者も気さくに丁寧に答えているので，メールアドレスの公開など，シラバスの内容充実が求められている。

図書館：開設時間が長いのはありがたいが，文献・資料が少ない。取り寄せ資料のコピー代の支払いは，現金では 17 時までなので，現職教員では困る。学内図書の所在不明が多い。

生協：閉店が早い。現職教員には利用不可能。

サテライト教室：ストレートマスターはサテライト教室の授業が多いと負担がある（移動に 5 限を空けているため）ようだ。

事務手続き：学部授業の集中講義登録は，年度当初に日程，内容，講師など概要が分からない段階で登録申請をするのはつらい。学部授業の単位登録数拡大。教務情報のメール連絡（特に免許申請，集中講義登録もしくは登録期間の統一）。掲示板を院生と学生とに分けて欲しい（見やすくなる）。後期の受講登録期間が夏休み中で，かつ期間が短い。月に一度くらい土曜日に窓口を開けて欲しい。

設備，その他：学会発表旅費への貸し付け支援制度。院生室の拡充（机，パソコン等）。ロッカーの数が少ない。夜間，構内が暗い。IPC のコピー枚数制限は，学部生と院生で差を付けて欲しい。

アンケート全体を通してまとめると，全体的には，現職教員は毎授業で新しいことをインプットでき，現場ではアウトプットばかりだったので，大学院での勉強はしんどいが，来て良かった。専修の先生だけでなく，教務課，学生課の職員さんも，院生のことを第一に考えて対応してもらっていると感じている。全般に満足のいく院生生活を送っている，という回答であった。ただ，いくつか問題点があり，早急に対応しなければならないものや，改良する余地があるのも多い，と思われる。